

## ジェームズ・デニーの生涯と神学 (三)

松浦義夫

### 序論

私たち神の被造物である人間が、「神」に関する問題や、その「神」に係わる知識を私たちが得る際に典拠となる「聖書」に関する問題を取り扱うに際して、私たちがまず心得ていなければならないこと、あるいは姿勢というものは、どういうものであるか、あるいは何よりも前に、まず「真理」の前に謙遜であるということである。あるいは心構えを保持するということである。あるいはまた、畏怖の念を抱きつつ事柄に臨むということであろう。このことは、ただ「神学」とか「聖書学」とかいった学問の一領域にのみ当てはまる事柄ではなく、いやしくも「真理」を探求する学徒ならば、どのような学問の領域に係わっていようと、まず心掛

けなければならぬ態度であり姿勢であるといえよう。しかし、人間の知的営みとしての様々な学問の分野がある中で、特に「神学」あるいは「聖書学」に係わる学徒には、このことが何よりもまして求められているのではないだろうか。すなわち、自らの栄光ではなく、「ただ神にのみ栄光」(Soli Deo Gloria)を求め、神を恐れつつ、その神の啓示される「真理」の前に、跪くという覚悟が必要とされているといえよう。そしてその「真理」が、自らの願いや主張と相反するものであれ、いやむしろそのような時にこそ、自らの願いや主張を捨て、「真理」を受け止め受け入れるという用意が、常にできていなければならないといえよう。

ジェームズ・デニーが、彼の神学的著作のいわば「三部作」の第一部であるともいえる『神学研究』

(Studies in Theology) を著した時代は、いわゆる「自由主義神学」の影響の最も大きかった時代ともいえる、十九世紀の終わりの時代であった。すでに考察して来たように、そのような時代にあつて、「時代の子」として、「真理」の前に跪き、「ただ神にのみ栄光」(Soli Deo Gloria) を求める神学の構築を、自らの責任として担い、神学の最も重要な問題について、簡潔明瞭に自らの言葉で表現した作品、それが彼の『神学研究』であるといえよう。

すでにこの『神学研究』の内容に関する考察に着手したわけであるが、さらにこの考察を、ジェームズ・デニー自身の記述に即して進めて行くことにする。

### 第一章「歴史」と「信仰」

ジェームズ・デニーが、「リッチル学派」の人々に對する批判を展開するに際して、重要な焦点のひとつとなつてゐるのは、同派の人々の「歴史」あるいは「史的事実」という事柄に対する、受け取め方またその扱い方に関するものである。ただし、この際「歴史」とか、「史的事実」とはいつでも、いわゆる「歴史一般」あるいは「史的事実一般」というような一般論としての事柄ではなく、具体的事柄、すなわち、『新約聖書』

によって伝えられている、イエス・キリストに係わる事柄、現代的表現でいえば、まさに「史的イエス」に関する事柄である。すなわち、キリスト教信仰にとつて、「史的イエス」は本質的な事柄なのかどうか、という問題であり、この点に関する「リッチル学派」の人々の受け取め方ないし考え方、また事柄を扱う際の態度ないし姿勢を批判しているわけである。

ジェームズ・デニーは、「リッチル学派」の人々の「史的イエス」に関する扱い方を批判するに際し、まず、『新約聖書』に記されている「奇跡」の問題から検討している。<sup>①</sup>「この学派(リッチル学派)の人々の、事柄の取り扱い方を認識するために、一つの例として採りあげられるのは、この学派の人々がいわゆる超自然的出来事というものを取り扱う際のやり方である。このことは、一見些細な事柄のようにも思われるのだが、その行き着く先には、大問題ともなる事柄が待ち構えているのである。

この点に関しても、彼らが自分たちの意図する所であると自認しているのは、やはり、例によって例のごとく、形而上学的事柄を排して、宗教的事柄を正当に評価するという扱い方である。彼らが巧妙にも指摘しているのは、例えばこういうことである。すなわち、

『聖書』においては、奇跡という事柄を定義するに際して、後の時代の護教家やスコラ学派的教義学者たちが定義しようとしているようなやり方では、していないということである。聖ペテロや聖ヨハネは、自然の諸法則というような概念には、一切関知していなかった。すなわち、いいかえれば、彼らにはたとえそのような表現を聞いたところで、それが一体どういうことを意味するのか理解できなかっただろうし、ましてや、ヘルシエルやミルならこのように定義しただろうと思われるような仕方では、定義しなかっただろうということは、いうまでもない事柄である。したがって、『新約聖書』において、奇跡と名付けられている事柄を、自然の諸法則との関連で、その侵害であるとか、その停止であるとか、あるいは修正だとか協同だとか、その他どのように定義しようと試みたところで、そのように定義付けようとすること、それ自体、愚かしいことである。そのような疑似科学的な正確さを求めるより、我々は、純粹に宗教的な定義をこそ求めるべきである。そして、このように表現すべきである。すなわち、宗教的人間（信仰者）によって、ある事柄が、神によってなされ、神の御国の進展の爲になされた力強い介入を示す事柄であると認識されるような事柄で

あれば、いかなるものであれ、奇跡と名付けるべきだ、ということである。科学者によって自然の諸法則と呼ばれている事柄と、このような神による介入によってなされる事柄とが、どのように関連付けられるか、というようなことは、宗教的（信仰的）問題ではないし、したがって神学的な問題ともいえない。科学者にとつては、宗教的人間（信仰者）が奇跡と呼んでいる事柄に対しての、自分なりの理解ないし説明もあるであろうけれども、それは、宗教的人間（信仰者）にとつては、あずかり知らない事柄である。彼にとつては、それはどうでも良い事柄なのである。彼には、科学者のなす、事柄に対する、単なる機械的説明を妨害しようとする権利もないかわりに、科学者の方にも、事柄に対する宗教的説明を妨害する権利もないのである。

ジェームズ・デニーは、このように「リッチル学派」の人々の奇跡に対する、理解ないし解釈の仕方を要約している。ここにも、すでに考察したように、同派の人々の主張する「科学」と「神学」の分離という精神ないし姿勢が、一貫して貫かれていることが理解できる。このように「科学」と「神学」、あるいは「科学」と「宗教」の研究領域を分離することにより、人間の知的営みの一つの分野としての「神学」の領域を確保

する、ということが目論まれているのであろうが、しかし、かえってこのような、一見「神学」の領域確保と思われる目論みが、「神学」それ自体の学問としての存在意義を危険に曝すことになるのである、ということを経ームズ・デニーは示すとともに、このようなやり方に批判を加えると同時に警告を与えている。

「ここにおいても、そのような解決策は、あまりにも安易なものである、という点を指摘せざるを得ない。奇跡という事柄をどのように解釈するか、ということに対しては、たしかに、それが持っている宗教的概念ないし意義というものを、全面に押し出さなければならぬ、という点に関しては、同意するに吝かではない。奇跡という事柄は、神が御国の進展および御民の幸福の推進のために、力強く介入される出来事である、というのが、最も肝心の説明といえるのである、自然の諸法則に対して、あれこれの方法で関連付けられるということが最も重大なことはいえない、ということも理解できる。しかしながら、人間の心というものは、同一の事柄に対して、何らの関連もない二つの異なる解釈を同時に受け入れることはできない。奇跡をまず宗教的に解釈し、次に科学的に解釈

するならば、最後にこれら二つの解釈の相互の関係を規定するということをしなすままでは解釈したことにはならないということになるのではないだろうか。すなわち、もしこれら二つの解釈が共に真実なもの、正しい解釈といえるものならば、何らかの点で、関係付けることが不可能であるということは、ありえないといえるであろう。もし関係付けることが不可能だとすると、二つのうち、どちらか一方の解釈が真実ではないのではないか、という印象を受けるのを避けることはできないのではなからうか。そして結局、真実なもの、真実であることと見做されるものが、それ以外のものを排除する、ということになるに違いない、と考えられるであろう。

奇跡に対して、その科学的解釈を犠牲にして、宗教的解釈をより拡大しようと目論み、この奇跡という事柄に対しては、科学的であるべきだといふいかなる要請をも認めることを、拒否し続けている、この学派に属する著者たちすべてに対して、次のような評価を下したとしても、不当であるとはいえないであろう。すなわち、彼らは、人間の知性のなかに自らの占める位置を与えられており、諸信条の中にも自らの場所を得ている型としての、奇跡という事柄を全面的に排除す

るということを、事実上行なっていることになる、ということである。リッチル自身が率直に述べているところにしたがっていうと、次のようになるのである。

すなわち、もし聖書に記されている奇跡に関する記述の中に、この世界は全体として、不可侵の物質的諸法則によって一つに結び合わされているのであるという規定と齟齬を来すようなものがあるとするならば、その場合、一見矛盾すると思われるも、そうではないのだとなんとか言い抜けすることも、また事実であると証拠をあげて確定することも、科学の扱う問題ではない。また問題となっている同じ事柄を、自然の諸法則に逆らってまで、神によってなされた行為の結果として起こった事柄である、というように認識するというようなことも、宗教の扱うべき問題ではない。要するに、聖書に記されている奇跡という事柄が、記述されている通りに起こったかどうかということは、問題にする必要がないということである。

リッチルはさらに続けて次のように議論している。すなわち、信仰者なら誰しも、自分自身の生涯において、奇跡を経験するであろう。神が驚くべき方法で、自分の為に介入して下さった、といいうる出来事を、誰しも指摘することができるであろう。このような出

来事と比較するならば、他人によって、経験されたといわれている事柄など、あれやこれや穿鑿したところで、まったく余計な御節介だとしかしいようがない、というのである。

このような表現を見ると、人によっては、まさに宗教的には非常に魅力的に思える態度であると受け止める人もあるだろう。あるいは、なんと無愛想な、横柄な、あるいは多分人を侮辱するような態度であると、受け止める人もあるだろう。しかし事柄の本質をよくよく考えるならば、誰しも、ある同じ出来事に対してなされた、宗教的解釈と科学的解釈の間に設けられた、分離絶縁という扱い方は、知性の持つ本来の性質を考えるならば、同意することはできないようなやり方である、というように感じるであろう。実際の問題として、結局のところ、こういった傾向を持っている著者たちは、科学的解釈によるもののみが、客観的真理である、と見做しているのであり、宗教的解釈によるものは、敬虔な人々には、自分自身の抱いている、敬虔な意見見解として確保してもかまわないものであるかもしれないが、他の人々に対して、それを押しつける権利は、彼らにはないのであり、押しつけようとしても、そのような手段なり方法といったものがない、という性質

のものでしかない、という考え方を主張していることになる。

さて、キリスト教が、超自然的事柄として言及する際に、そのような事柄が、敬虔な人々にとつては、神が特別な恵みとして与えて下さった出来事なのだと思ふことができるような、いくつかの幸運な機会に属する事柄や、偶然的出来事と見做すのが穏当な解釈であると思われるような事柄だけを、視野に置いて来たとするなら、今問題にしている事柄に対して、この程度の認識や解釈をしても、許されるかもしれない。しかし、こういった扱い方は、事柄の本質を考えると、本筋からかなり離れてしまっているのである。あれやこれやの奇跡ではなく、復活という最大の奇跡を取りあげることににより、このことを考察してみよう。『新約聖書』自体の記述に従えば、キリスト教の全機構が、死に打ち勝つ生命に対する信仰も含め、この出来事の基礎の上になり立っているのである。この出来事が真実であると認めるとするならば、その宗教的解釈は明白である。すなわち、この出来事は、神御自身が、御子の主張の正しさを立証するため、介入された偉大な出来事であり、それは、贖罪の御業の遂行の為になされた、神の行為といえよう。この真実を信じる者にとっては、

ただ、神が御子を甦らされた、としか言いようがない。しかし、最近出現したこの学派に属する著者たちは、この出来事を、自然の諸法則に従って説明するのは、科学にとつては不可能な事柄である、ということを中心得ているので、この事実そのものを否定してしまうことに躊躇しないのである。これ以外の事柄に対しては、推して知るべしである。したがって、このような流れに属する、指導者の位置にある代表者とも呼ぶべき、ハルナックは、次のように記すことになる。すなわち、歴史家という者は、奇跡という出来事を確認された歴史的出来事である、と認める立場に立つわけにはいかない。というのは、そうすることによって、彼は、すべての歴史的調査が基本としている、出来事を観察する際の方法論そのものを、損うことになるからである。個々の奇跡は、すべて史実性という点では疑問の余地のあるものである。このように疑問の余地のあるものを、いくら寄せ集めたところで、けっして史実性を確証するには至らない。こういうことにもかかわらず、もしその歴史家が、イエス・キリストはある特別な行為、しかも厳密に表現すれば、奇跡的行為と見做しうるような行為を行った、と確信しているとすれば、それは、彼がこのイエス・キリストという人格から受

け取っている印象、すなわち、彼イエスには、超自然的力が具わっているのだという、倫理的宗教的印象に基づく観点に立って議論しているのである。こういった内容の事柄は、それ自身、宗教的領域、信仰に関する領域に属する事柄である、というように、ハルナックは主張している。

こういった考え方の底に、前提としてながれているのは、宗教的信仰的領域に属する事柄であるから、確証された事実、客観的真理の占める領域には属さない、という考え方であるように思われる。しかし、もともとは形而上学に反対するという偏った傾向にある、この学派の著者たちが強調する、キリスト教の持つ歴史性、中でも、キリストにおける神の啓示の歴史性の重要性の主張と、ここでハルナックが行っているような、その歴史的性格を持つ神の啓示がなされる際に、その為の方法ないし手段として用いられる、様々の出来事の中でも、典型的なものとも呼ぶべき出来事の多くのものを持つ歴史的性格を、常に疑ってかかるような主張には、首尾一貫性が欠けていると、いわざるをえない。このように人間の知的営みの中に、宗教的信仰的領域での活動と、歴史的調査の領域での活動というように、一刀両断に分離し区別を設けることにより、必

然的に人間の心というものには、一個の全体として生活を営むうえでのこのような分裂に対して、反抗を企てることになるだろう、と感じざるをえない。一人の人間として、歴史家としての、物理学者としての、そして、これは侮辱するというのでないなら、敬虔な神学者としての、それぞれの性質を持った者として、生きなければならぬのが、現実生活している人間、同一の人間なのである。従って、彼には、それらすべての性質を一つに統一するような、何らかの方法が必要になってくる。科学者としての彼の任務は、それらの相互の関係を否定するのではなく、規定していくということである。また、生命に対する宗教的解釈に、主観的また非現実的というような影を投げ掛けておいて、神の存在を無視しても可能な解釈にのみ、客観的真理を取っておく、ということではなく、むしろ、宗教的事柄の持つ現実性を明らかに示し、真の神概念を通して、自然も歴史も、共に事実として、神の道具となりうるということ、さらに、自然においても歴史においても、まさしく神の真理の具体的実現であり、神の愛と力の実現であると思ふべき出来事が、存在することを許されているのだということを、立証することである。もしも我々が、超自然的出来事を、宗教的方法

でのみ定義し、その自然および歴史との関連を規定するといふ企てを拒否するならば、實際上その結果として起こるのは、超自然的出来事を考察の範囲からすべて放棄してしまう、ということになる。

以上、ジェームズ・デニーの記述にしたがって、彼自身の理解している型での、リッチル学派の人々の、「歴史」と「信仰」の關係に対する理解および、研究方法の問題点を見たわけであるが、このようなジェームズ・デニーの指摘を、現在我々としては、どのように受け止め、また理解すべきであろうか。ジェームズ・デニーの主張には、首尾一貫している事柄と呼びうるものが存在する。それは、「統一性」という事柄である。それが、人間の知的営みにおける「統一性」である場合もあるし、神学の研究の主な典拠となる『新約聖書』それ自体に内包されている、「統一性」あるいは「一貫性」という場合もある。特にただ今主題としている、「奇跡」という超自然的出来事に対する解釈にも、ジェームズ・デニーは、「統一性」を求めるわけである。

一人の人間が生きるという時、ある時は信仰者として生き、ある時は科学者として生き、ある時は歴史家として、またある時は文学者として生きる、というよ

うな生き方をするわけにはいかないであろう。たしかにその時その時によって、自分がどういう立場に立って考察しているのか、また表現しているのか、というような「区別」は、たしかに必要であり、現実的であろう。しかしながら、そのような場合も、信仰を持った科学者として、また信仰を持った歴史家として、神学者として、あるいは、信仰を持たない人間として語るべきであり、また実際一個の統一体としての人格を具えた人間としては、その時その時の立場に立って人格を分離させるわけにはいかない。「統一性」としての人格の一部に起こった事柄は、けっしてその一部だけに留まらず、いづれ人格全体に影響を及ぼすことになる。したがって、一個の人間として、生きている我々は、その時その時の立場の「区別」ということも必要かつ現実的ではあるが、何らかの方法によってこの「区別」されたものが、「統一」されるような営みを必要としているわけである。したがって、ここでジェームズ・デニーが扱っている、「歴史と信仰」との関連でいえば、歴史家として調査し探究し、その結果として得られた結論は、信仰者としての同じ人格の持っている信仰自体に、必然的に影響を及ぼす、ということである。



人間の知的営みとしての「神学」は、人間の知的営み全体の中に自らの位置を占めている。したがって、必然的に他の分野の学問とも、何らかの関連を持った位置にまた立場に立たざるをえない。現代においては、人類の知識の理想的な統一ということは、現実的ではないこと、不可能に近いこと、というように言えるかもしれない。しかし、我々は、その理想的な統一に、一歩でも近づくように努めるといふ営みをけつして中断してはならないであろう。今日我々の現実に生活している時代において、学問の分野は、それぞれ専門化が極端に進み、かつてのような、いわゆる百科全書の知識を持ち、しかもそれを統合することのできる能力を身に付ける、というようなことは、天才と呼ばれる人々にも不可能なことにように思われる状態である。しかも、それぞれの学問の領域の中でさえ、専門化、知識の断片化が進んでいる。しかし、このような状態は、けつして望ましいものではないし、また健全なものではない、という点に関しては、誰も異論はないであろう。学問の分野の断絶という観点から考えると、「神学」と他の学問の分野の關係に、このことが特に顕著に現われている。かつては、「諸学の女王」として、人類の知的営みの全てを統合し、支配していたは

ずの「神学」が、その地位を奪われ、ついには、学問としての価値さえ危うくされそうになって来たことに對する危機感から、「神学」の学問としての地位だけは、何としても確保しようとして成立したのが、「宗教」の領域、「信仰」の領域をのみ扱う学問としての「神学」という考え方であろう。いわゆる「自由主義神学」と呼ばれている「神学」も、こういった危機感から生じた、と言えなくもないであろう。このようにして、「神学」の学問領域を確保したうえで、他のいわゆる「世俗」の学問から「神学」を切り離し、まったく關係を断ってしまうことよつて起るのは、「神学」がより「聖化」されること、というよりはむしろ「神学」の「秘教 (esoteric philosophy) 化」ということにもなりかねない。日常生活から離れて各自の個室に引きこもり、その中では、日常生活を送る際の心性とは異なった心性で過ごす、というようなものである。あるいはまた、「聖日」と「週日」では、別の人格として過ごすというようなやり方である。このように「神学」を他の学問と切り離すことよつて、たしかに、両者の間に存在する潜在的な争いの炎が、再燃することは防げるかもしれないが、しかし、それも「神学」および「宗教」の活動領域を、生活の中の特

殊な場所、秘密の片隅に、そっと保存しておく、というような犠牲を払ってのことである。しかし、もし我々が、このような断片的な生活、多重人格者の生活を送ることに満足しないとすれば、一個の人格として、全生活を何らかの型で統合しようと企てるのも、またそのように努めるのも、避けるわけにはいかないであろう。また人類の知的営みの統合を、不可能なこととして諦めてしまうことで満足しないとすれば、ただ

争いを避けるというだけではなく、むしろ、より積極的に互いに別の角度から光を与えることにより、「神学」をより開かれた、また統合の為の推進力としての学問として築いていく努力が必要であろう。

ところで、ここで取り扱っているのは、他の学問と違って、特に「歴史」と、キリスト教の信仰との関連である。キリスト教における「信仰」あるいは「神学」というものは、その源泉ないし成立根拠を、歴史上の一人格である、イエス・キリストという具体的存在における「啓示」に持っているものであり、その成立年代もわからない「神話」や、歴史性を超越した一連の「法則」、あるいは理論的に考え出された「真理」、というようなものに依存しているわけではない、とするならば、「歴史と信仰」あるいは「歴史と神学」と

いったことは、「信仰」それ自体にとっても、「神学」それ自体にとっても、避けて通るわけにはいかない事柄といえるのである。

ジェームズ・デニーが、ここで例としてあげている「奇跡」の解釈の問題にしても、やはり、「歴史と信仰」という点で避けて通れない問題といえるであろう。もっとも、初代教会の人々も、また後に『新約聖書』として編纂されることになる文献を著した著者たちも、今日の我々の考えるような「史実性」に対する詳細な報告として、「奇跡」を記したわけではなく、最大の「奇跡」とも呼ぶべきイエスの「復活」という出来事を、よりよく理解できるように、ということに主眼を置いて記したのである。すなわち、『新約聖書』の中の「奇跡」の記事にも、デニーの好んで使用する表現でいえば、「首尾一貫性」ないし「統一性」があるわけである。すなわち、このイエスという歴史上存在した具体的人格において、「復活」という超自然的出来事で介入された神は、生前のイエスにおいてすでに「奇跡」という超自然的出来事で介入されたのであり、これらの「奇跡」は、「復活」という出来事でその頂点に達する、というように記されていると考えるべきであろう。し

たがって、キリスト教の信仰が、「復活」という歴史的具体的事柄に土台を持つかぎり、どうしても「歴史」と「信仰」を切り離して議論するわけにはいかない、ということになるであろう。

## 第二章 形而上学と信仰

いわゆる、「神学」と「哲学」を巡る問題は、初代教会以来、論争的になって来ている。この理由として考えられるのは、人間の知的営みである、種々の学問の中で、「哲学」が、「神学」に最も近い領域に位置しているように考えられるからであろう、と思われる。すなわち、「神学」は、「信仰」という基盤に立って、「神」「人間」「世界」等に関する概念を展開するわけであるが、一方「哲学」の方でも、歴史上に名を止めている「哲学」の多くが、「神学」の扱う主題とほぼ同じような事柄を扱っており、しかも「神学」と異なるのは、「信仰」という基盤に立ってではなく、むしろ「理性」あるいは、通常の「経験」というものを手掛りとしつつ、「神」「人間」「世界」等に関する概念を展開するということである。大雑把な表現であるかもしれないが、扱う「主題」が同じであるが、その「主題」を探求する際の「方法」が、「哲学」と「神学」

では異っている、ということから、「神学」と「哲学」という学問の近きとともに、区別があるというように理解できるであろう。

歴史上見られる、「神学」と「哲学」との関係は、大きく言って二つの立場に分かれるようである。すなわち、両者の関係を「敵対」としてとらえる、テリトリアヌス以来の流れに立つ立場と、両者の関係を「友好」ないし「協力」の関係であるととらえる、殉教者ユステイノス以来の流れに立つ立場である。ところで、ジェームズ・デニーが理解している型としての、「リッチル学派」の「神学」と「哲学」の関係はどちらの立場であり、また、ジェームズ・デニー自身の立場はどうなのか、ということに関して、考察してみることにする。

ジェームズ・デニーの記するところによると、「リッチル学派」の「神学」と「哲学」の関係のとらえ方の立場は、一見すると、両者が何らの関係のない、まったく独立した学問としてとらえているようでありながら、その内実は、「神学」と「哲学」の分野の中でも「形而上学」とは、「敵対」ないし「対立」するものにとらえている立場であるように思われる。この点に関する、ジェームズ・デニーの記述を見ると次のように

表現されている。<sup>③</sup>

「ここで考察しなければならぬのは、キリスト教神学にとって、中心的位置を持つ主題、したがって最も重要な主題として扱われるべき事柄、すなわち、『キリストの神性』あるいは『キリストの神格』という事柄についてである。……キリストは、キリスト者の意識にとつては、神としての宗教的価値を持っている、というように彼ら(リッチル学派)は言っている。我々の、神に対する最高の概念は、キリストにおいて啓示せられた概念であり、我々と神との最も正しい友好的交わりは、キリストを媒介とすることによって成立するものである。キリストは、神について語るだけではなく、キリストにおいて、神御自身が、我々の所にまで降りて来られるのである、と彼らも主張する。勿論これらの事柄は、キリスト者ならば誰でも、そのように表現している事柄である。しかし、キリスト者は、ここで発言を止めてしまふわけにはいかない。彼らは、このキリストと呼ばれる、並外れた驚くべき人格が、一体どういう存在なのか、ということに対する説明を要求しようとする、心の本能的な動きを、押し止めるということはできない。キリスト者は、やがて、御子以外に御父を識る者はいない、したがって、キリ

ストは神より来た方だという、純粹に宗教的な説明でのみ満足すべきであり、これ以上の説明を求めようとするのは、時間の浪費である、などとは言っておれなくなるであろう。我々は、こういった事柄に対しては、どうしても、何らかの説明を求めないではおれなくなるものである。知性を具えた存在として我々は、人間たちのただ中に、神としての宗教的価値を有する一個の人格が存在するという出来事に直面して、心の中に必然的に生じる、この出来事の中に含まれる様々な疑問を、解決しようと思ふをえなくなるのである。この点を越えることを拒むような神学者は、形而上学に對する宗教的冷淡という偽装のもとに、實際は、キリストの神性という事柄に對して、客觀性を与えると思われるようなすべての出来事を断固として信じまいとする姿を覆い隠しているのだ、ということが、必然的に明るみに出されてしまふであろう。彼らは、キリストの超自然的誕生も認めないし、パウロによって宣教されている、キリストの先在に關しても認めない、また、御言(ロゴス)の受肉の教理も認めない、すくなくとも福音書記者ヨハネによって宣教されている型のものとしてはそれを認めない。要するに、イエスは、キリスト者の意識においては、神としての宗教的価値

を持っているにもかかわらず、彼は、科学的認識においては、人間だれしもが一般的に共通に持っている価値を持っているにすぎない、ということになる。イエスは、科学という中立な立場に立つ観点からいえば、事实上、誰とも変わらない同じ人間、単に一個の普通の人間にすぎない。このイエスに対して、神としての価値を認めるのは、単に価値判断、すなわち敬虔なキリスト者としての主観的評価にすぎないのである。しかし、このような立場には、人間の心というものは、遅かれ早かれ、遅かれというより早かれといふべきか、安んじてはおれなくなるような立場であるということとは、あえて言う必要もないことかもしれない。歴史の舞台には、このようないわば二重真理ともいえるような考え方は、何度となく登場しては消えさり、通り過ぎて行ったが、本質的には、宗教に垣根を巡らすことによって、科学が攻撃不可能な領域を確保するための方策として、考え出されたものなのである。しかし、もうそろそろ我々も、このような方策は遂には効を奏さなくなるのだ、ということに気が付いてもよさそうな時に来ているのではないだろうか。我々の持っている科学的確信に対して認められている、客観的価値と同じように現実的なものとしての客観的価値を、我々

の持っている宗教的確信に対して認めることができな  
いとしたり、またこの我々の宗教的確信というものが、  
科学的確信とともに、我々の知的活動全体の中に統一  
できるものとして組み入れることが出来ないとしたら、  
我々の持っている宗教的確信は消え去ってしまうとい  
うことになるだろう。宗教的事柄と、科学的的事柄を分  
離してしまう、ということが、ついには、宗教を真理  
から分離してしまうことになりかねない。そして、そ  
れはとりもなおさず、宗教は、真理を愛する人々の間  
においては、死に絶えてしまうということの意味する。  
このように、ジェームズ・デニーは、述べている。

『神学研究』の後の講において、より具体的に「哲学」  
特に「形而上学」と「神学」の問題が扱われるのであ  
るが、この個所でも明らかなように、「リッチル学派」  
の人々の考える「形而上学」というものと、ジェーム  
ズ・デニーの考える「形而上学」では、かなりの違い  
があることが理解できる。「リッチル学派」の人々に  
とっては、イエスは信仰の模範ではあるが、実質的に  
信仰の対象ではない、イエスは最初のキリスト者であ  
り、キリスト教の創始者である。言葉を変えて言えば  
私たちは、キリスト者として、イエスの経験と同じ経  
験を持つことができ、イエスの信仰と同じ信仰を持つ

ことも可能である。したがって、イエスは、私たちキリスト者の第一の者でありかつ最高の代表者ではあるが、これ以上を越えるのは、すなわち、このイエスに関して、「神性」を云々することは、「形而上学」であり、具体的存在としてのイエスから離れることである。一方ジェームズ・デニーにとっては、まさにこの具体的存在としてのイエスを、事柄に即してしかも、理性を与えられた存在としての私たちが、理解し解釈し表現しようとする際に、私たちの代表者というだけでは済まない要素を認めざるをえない、それを初代の教会においては、「神性」というように表現したのであり、かえって、具体的存在としてのイエスに密着したところより生じた事柄である。したがってこれは彼ら「リッケル学派」の言うような「形而上学」ではない。むしろ、具体的存在としてのイエスから離れ、理論的に考え出された「理想のキリスト者」としてのイエスを描き出そうとしている、「リッケル学派」の人々の方がより「形而上学的」と言わざるをえない。

十九世紀後半の時代、それは自然科学の分野で目覚ましい発展を見た時代と言いうるのである。それとともに、人間の能力に対する信頼、いわば楽観的な人間観ないし世界観が持て離された時代でもあったとい

えよう。そのような時代にあつて、いわば「理想的人間」として、また「人類の代表」としての姿を人間イエスに読み込んでしまうということが、科学に対抗しつつ行われた。したがって、科学に対抗しているようでありながら、実際上は、最もその時代の精神の影響を受けてしまっているのが、「自由主義神学」の姿といえるのではないだろうか。

ジェームズ・デニーは、その時代にありながら、今一度、具体的イエスから出発しなおそう、伝統的信仰を問い直そうとするのである。(以下次号に続く)

注 (1) Denney, J. *Studies in Theology*. London, 1904, P. 8.

(2) *Ibid.*, P. 9.

(3) *Ibid.*, P. 13.